音読を楽しむ　古今和歌集　仮名序

やまとうたは、人の心を種として、よろづ(ズ)の言(こと)の葉とぞなれりける。
やまと歌（和歌）は、人の心を種として、　さまざまな言の葉（言葉）となったものである。

世の中にある人、ことわざ繁(しげ)きものなれば、
この世の中に生きる人々は、関わりのある出来事が多いものだから、

心に思ふ(ウ)ことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ(イ)出(いだ)せるなり。
託して、　言い表すのである。

花に鳴く鶯(うぐひす)(イ)、水にすむ蛙(かはづ)(ワズ)の声を聞けば、
※河鹿

生きとし生けるもの、いづ(ズ)れか歌を詠(よ)まざりける。
どれが歌を詠まないということがあろうか。

力をも入れずして天地(あめつち)を動かし、

目に見えぬ鬼神(おにがみ)をもあはれ(ワ)と思はせ(ワ)、
精霊たちをもしみじみと感じさせ、

男女(をとこをんな)(オ)(オ)の仲をも和(やは)(ワ)らげ、
親しくさせ、

猛(たけ)き武士(もののふ)の心をも慰(なぐさ)むるは、歌なり。
勇猛な　なごませるのは、

※河鹿…カジカガエル。清流に生息し、夏から秋にかけて澄んだ声で鳴く。

仮名序

『古今(こきん)和歌集』には、仮名(かな)で書かれた序文「仮名序」が収められており、和歌の本質や六歌仙(ろっかせん)への評、古今和歌集の編集の経緯(けいい)などが記されている。

確認テスト

(1) 古今和歌集の「仮名序」を書いたとされる人物を答えなさい。

［　　　　］

(2) 次の文の解答欄（かいとうらん）に当てはまる言葉を、本文中から書きぬきなさい。

古今和歌集の「仮名序」では、和歌というものは、人の心を［　　］として、そこから生え育った［　　］のようなものであると述べられている。

(3) ――線部「いづれか歌を詠まざりける」が表す内容として適当なものを選びなさい。

ア いつか歌を詠むことだろう
イ いつしか歌を詠まなくなった
ウ どれもみな歌を詠むのだ
エ どれも歌を詠むことはない
オ どれでも歌に詠むことができる

［　　］

(4) 古今和歌集の説明として適当なものを選びなさい。

ア 漢文で記された「仮名序」が収められている。
イ 最初の勅撰（ちょくせん）和歌集で、平安時代に成立した。
ウ 藤原定家（ふじわらのさだいえ）が代表的な撰者である。

［　　］